

誰のために刃を向けているのか

汪翔
wangxiang

ほぼ一ヶ月前のことだった。放課後、美容室で髪を切ろうとして、座って順番を待っていた。窓から襲ってきた初冬の寒気を感じた私が、カバンを抱えて読むともなく小説を読んでいたときだ。結構待つなと思っていたら、理髪が終わって帰ろうとしていたお爺さんと目が合った。どこかでこの優しい目線を見たことがある気がしたが、とうとう思い出せなかった。そしておじさんに、「お近くのXX家のお孫さんですか？」と聞かれたその瞬間、私は頭が真っ白になってしまった。彼の親しげな様子を見ているうちに私は二年前亡くなった私のお爺さんの面影が脳裏に浮かび上がってきたのだ。口から「すみません、私、中国人です。」と言い出すまでの一秒間は、信じられないほど呆然としていた。彼が離れた後、涙が止まらないほど溢れてきた。

来日してから、初めて日本についてわからないことが沢山あることに気づいた。現実の日本は多くの中国人が憧れているアニメやテレビ番組の世界ではない。それに、ニュースサイトを開いてみると、中国に関するマイナスなニュースが必ず最初に見つけられる。その下には、とても正視できないようなコメントが枚挙に暇がないほど多い。最初はニュースを読みながら日本語を勉強しようとしていたが、外国人を批判するコメントばかりが気になって、この国にいる意味すら疑い始めた。一体、こう言う人達は誰のために刃を向けているのか？

ここで、ウィリアム・サムナーの説から考えて

みると、日本人であることに自尊心を持つ人達が内集団、一方、日本ではなく外国に関係がある人達は外集団であることが成り立つ。中国に関するニュースを見つけると、必ずや自分の世界観に合わせて説明しようとして、ヘイトコメントにいいねをつけることで、中国に対する悪意がさらに強くなる悪循環が生み出される。他国の人を余所者として厳しく扱うことで、同じ思想を持つ仲間との絆を強化できる。また、非常事態に対して、政治家やメディアは他国のせいにするすることで、自分たちが内集団であるという意識を高めることができる。だが、問題はまさに此処にある。ウイルスの元凶となった国として攻撃されている身を守る為、中国人同士には強い結束が生じ、逆に民族主義的になっている。このように、民族間の対立の終息には切りがない。

一応私の拙論だが、これは正しく環境問題のように解決しないといけない事だろう。例として、発電所の汚染問題が知らされている今、ソーラーシステムが使われている家がどんどん多くなっているという。つまり、人々は自分に直接関することを重視する傾向がある。それに、中国人の立場で、倫理的なコメントをしても、すぐ悪評に呑み込まれ、自分とは関係ない、どうでもいいと考える人が沢山いる。感情的な事を共有することも重要だと考える。恐らく、あのお爺さんのような日本人と出会わなかったら、私は今また落ち込んでいることだろう。